



水の旅路。

川は山に生まれ、人々の生活の幸を見つめながら、海へと流れてゆく。長沼と会津を隔てる奥羽山脈——その山々の懐から湧き出る泉は、せせらぎとなり、集い、やがて川となり、町を潤す。

長沼にはいつも、豊かな水がある。その昔、伊達政宗が豊臣秀吉の命を受け、整備された会津街道(白河街道)。この道は江戸時代、参勤交代の道でもあった。その美しい街道筋には、通行中の会津侯が清き流れに心をひかれ、清水を飲んだという故事が伝わる「殿さま清水」がある。さらに、白馬の尾をたれたような見事な景観が楽しめる「馬尾の滝」や「銚子ヶ滝」「姫子の滝」……そんな美しい滝や淵が、ひそやかに、清冽な瀬音を奏でている。このような美しい自然に磨かれた名水のふるさととは、清らかな水と、人々の知恵を存分に活かした名品を生み出してもきた。酒、豆腐……これらは、いずれも良質の水、おいしい水がすべての源である。

人が水を愛するほどに、水は人を、暮らしを優しく包みこんでくれる。今では勢至堂トンネルの入り口近くまで引かれた「殿様清水」の水を求めて、休日ともなれば、人が次々と訪れる。いつの時も変わらぬおいしい水がそこにある——。町の誰もがそのことを、十分すぎるほどに知り抜いているからだ。それは、暮らしの中に、ふるさとの自然への感謝と信頼、そして誇りが、確かに息づいている証でもある。

北から町へ流れるのは、岩瀬村額取山ひたいどに源を発する簀の子川。そして西北からは、勢